学校だより

１０月号
横浜市立大道小学校
平成３０年９月２７日

学校ホームページ：横浜市立大道小学校　検索

校　長　富岡　正雄

100　93　85　77　70　63　56　49

この数字は、フランスの心理学者リンゲルマン氏のある研究でのものです。
その研究とは、「リンゲルマン効果」というもので、概略は次の通りです。

「集団作業時の一人あたりのパフォーマンスを数値化したもの」

＜実験の場面＞　１対１で綱引きをした時の１人あたりの力の入れ方を１００として、２対２やそれ以上の人数の時の１人あたりの力の入れ方を表す数字。

＜実験の結果＞

・２対２の時は９３
・３対３の時は８５
・４対４の時は７７
・５対５の時は７０
・６対６の時は６３
・７対７の時は５６
・８対８の時は４９

＜この実験結果から分かること＞

・綱引きの人数が増えれば増えるほど、１人あたりの力の数字は下がる。つまり、全力の力の発揮はされなくなる。
・その原因としては、「他の人が何とかしてくれるだろう」「自分が全力で頑張らなくても、何とかなるだろう」という気持ちが無意識のうちに働いてしまうから。
・この実験は、集団作業時に、取り組む人数が増えると、一人ひとりの力が下がってくるという傾向を示している。

Ｅテレ　「大心理学実験」でも同様の結果

2015年１月１日に放送された上記の実験の概略は次の通りです。

筋骨隆々な男性５名が、「トラック引きの挑戦」をする。結果は、
・１名ずつ引いた場合の個人の引っ張る力は、１０６、０kg
・３名　〃　、１００、２kg
・５名　〃　、　９７、９kg
となり、「リンゲルマン効果」と似た結果になった。さらに、別の５名（大学サッカー部員）で行ったが、結果は似たものだった。偶然の結果ではないことが分かる。

集団活動やグループ学習で力を発揮するためのﾓﾁﾍﾞｰｼｮﾝは・・・

人が人に頼ることは大切なことですし、人の力を借りて自分の負荷を減らしたいと考えるのも自然な気持ちだと思います。でも、大勢で取り組んで成果が出たということもたくさんありますので、集団の力を期待することもあります。では、「リンゲルマン効果」の結果を認識しながらも、日常生活や学校生活で一人ひとりがもつ自分の力をなるべくたくさん発揮できるようにするために、気をつける視点を考えてみました。４点紹介します。

１．グループや班で活動する時に**「一人ひとりの役割や担当」を明確にしていく。**
２．一人ひとりの活動の様子が分かるように**「見える化」をしてみんなに知らせていく。**
３．お互いの頑張りや活動の成果に対して**「認めること」や「応援すること」を続ける。**
４．取り組む活動に対して**「楽しい」「やってみたい」という雰囲気をつくる。**

子どもの周りにいる私たちは、「リンゲルマン効果」と「その対策」を併せて考えながら子どもたちへの支援をしていきたいものです。

（参考資料）・「日本社会心理学会　広報委員会」・Ｅテレ「大心理学実験」2015,1,1　他